

これからの大学教育

— 広島大学高等教育研究開発センターで考える —

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：広島大学には何をするためにいったのですか。

A：(林明夫：以下省略)広島大学高等教育研究開発センターで、2007年8月20日から3日間開催された「高等教育の質的保証と学生」をテーマとする公開セミナーに参加するためです。大学関係者、十数名の参加でした。使用言語は日本語。

Q：どのようにして、このセミナーに参加したのですか。

A：このセンターから e-mail 配信されている研究会案内で知り、申込みました。ちなみに、このセンターの配信する国内外の高等教育についての研究会案内は非常に有用です。

激動する国内外の大学が今後どのようになるのかに関心のある方は、自動配信の登録をし、これぞという勉強会には積極的に参加することをお勧めします。

Q：どのような内容が議論されたのですか。

A：今日、世界の国々において、大学をはじめとする高等教育の大衆化や国際化の進展等に伴い、その最大の受益者である学生の学びをどのように保証するかが課題となっています。そこで第一に、欧州の経験から、高等教育の質保証と学生の参加が議論されました。欧州の多くの国では、学生は自分の受ける授業の評価にとどまらず、大学の運営の様々な面にも参加し、時には教授会や理事会など最高意思決定機関に加わっています。

Q：えっ、ヨーロッパでは学生が教授会や理事会にも参加するのですか。

A：はい。今日では、ボローニア・プロセスが進む中で、質保証の観点から学生の参加が重視されています。

Q：その「ボローニア・プロセス」というのは、何ですか。

A：1999年になされた「欧州高等教育圏」の構築のための欧州29か国の共同宣言である「ボローニア宣言」にもとづき、2010年を目標に進められている取り組みです。

欧州域内の高等教育に、学位システムと単位制度を中心とした共通の枠組みを構築し、人(学生と教員)の交流を高め、欧州域内の高等教育(つまり大学)の国際競争力の向上を狙いとしています。

Q：日本の大学も、質保証への対応に追われているようですね。

A：はい。従前は、大学の役割・機能が厳格な入学試験を通じた学生の潜在能力の発見にあったようです。つまり、入試が難しい大学の学生は能力も高いと思われていました。しかし、今後は、厳格な成績評価による大学の質保証へと大学の役割・機能が根本的に変化しつつあります。

Q：出席さえしていれば単位乱発の楽勝科目では、質の保証ができなくなる。そのような大学は国際競争力がなく、淘汰されるということですね。

A：その通りです。18歳人口減時代においては、入学志願者数も減少しますから、大学や短大はマネジメントやマーケティングの工夫も不可欠となります。

これに加えて、大学の教育面、特に授業の工夫は、学生の学びに直結する質保証のテーマとなります。

さらに、補修教育(リメディアル教育)や初年次教育、キャリア教育などの学習面にとどまらない、大学生が抱える生活や精神面の課題とそれに対応する学生支援システムの在り方も重要となります。

Q：大学の外部評価も厳しいようですね。

A：大学教育の質保証のために、在学生による授業評価を含む外部評価が日本でも定期的になされるようになりました。それがどこまで有効か、諸外国との比較で議論されました。

Q：日本の大学は、随分と変化しつつあるのですね。

A：はい。欧州では、ボローニア・プロセスにより大学教育の質が急激に向上しつつあることに加え、ユネスコとOECDがWTOの要請で「国境を越えて提供される高等教育の質の保証に関するガイドライン」を制定。高等教育がWTOのサービス貿易品目に入るに至りました。各国がそれぞれの高等教育制度に照らして、その責任において自国の高等教育の質を確保することを承認いたしました。

日本の大学も、品質を高め、国際競争力を持たない限り存在できない時代に突入したと言えます。

Q：そのような実感は余りないのですが。

A：大地震が海の向こうで発生し、津波が押し寄せるのが明らかなのに浜遊びをしているのと同様なのが、大半の日本の大学関係者のように私には思えます。

Q：では、どうしたらよいのでしょうか。

A：アメリカやカナダ、オーストラリアでも欧州諸国以上に大学教育の質を向上させ、よりよい教育と研究をすることで国際競争力を高めようとしています。シンガポールや中国、アジアの国々も同様です。

文部科学省も、世界の動きに対応できるよう規制を大幅に改革しつつあります。自己責任、自助努力こそが求められるのが、今日の日本の大学です。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営者の皆様に一言どうぞ。

A：ただ目の前の入試に合格させればよいのでは、自らの社会的責任を果たしたことになりません。今教えている児童・生徒が進学する大学等の高等教育機関が今後どうなるかを考えた上で、何のために生きるのかを自らの力で考え、目的意識や自己学習能力を育成すべきと確信いたします。

最後に、本を一冊御紹介いたします。金子元久著「大学の教育力—何を教え、学ぶか」ちくま新書 2007年9月10日刊。高等教育研究の第一人者である金子先生の渾身の作品です。5～6回読むと大学問題の本質が頭に入り、今教えている児童・生徒に大学入学までにどのような教育をせねばならないかを「考えるヒント」になります。

— 2007年9月25日記 —